



International Mission Council

Christine McGrievy, Vice International Co-ordinator

国際ミッション委員会副国際コーディネータ クリスティン・マグリリーヴィー



No. 16 2010年11月

ハイチの首都ポルトープランスのコミュニティをコーディネータが訪ねる時のことです。仲間の一人でハンディを持つジョリボワ(Jolibois)という男性が来て、一人のコーディネータを静かな一角に連れて行き、自分がコミュニティについて気になっていることをすべて打ち明けます。彼は自分の話をちゃんと聞いてもらえたかどうかを知りたいがります。コーディネータが訪問を終えて帰ろうとすると、再びジョリボワがやって来てさっきと同じ場所に連れて行き、疑問点や問題点をちゃんと確認してもらえたか、そしてそれらに取り組んでもらえるかどうかをコーディネータに尋ねます。そこでジョリボワは安心してコーディネータを帰らせるのです。。。



10月21日から27日まで、私たち International Mission Council は太陽が輝くエクサンプロバンス(フランス)のラボーム(La Baume, Aix-en-Provence)に集まりました。このグループが集まったのは、連盟の組織体制や配置を試す時期についての投票を行って以来、2度目のことでした。そこで私たちはたくさんのひらめきを確認しました。すべてのコーディネータは自身のミッションの中に国際的な要素を持っていること、そして、全員が一つになるために、グローバルな視野と理解を育てていくことが大切だということです。また、私たちそれぞれの役割に関する特異性を深めていく

ためには、仲間たちと出会うことがとても大切です。

そこで私たちは、大きなグループで3日間を過ごし、その後、認定されたカントリーコーディネータ、ナショナルコーディネータ、そして代理コーディネータたちで構成されるサブグループに分かれました。International coordination teamからもさまざまなメンバーたちが出席し、コーディネータたちにサービスとサポートを提供し、3つの新しい役割が加わりました。①戦略的発展②資金調達 ③人的管理です。

このミーティングは、ワシントンで開催される次回の総会の準備の開始を記すものとなりました。これから新しい組織の整備や、次期マニフェストを育てるプロセス、将来の国際コーディネータと国際理事会の理事長を任命する作業があります。私たちは移行期に入ったのです。

このような変化の真ただ中であって、それぞれのコーディネータが自分たちの任務を全うし、連盟として活力にあふれているのを見て、とても心強く思いました。私たちはみんなで力を合わせて、現段階での疑問点や新しいチャレンジについて確認することができました。

エクサンプロバンスにいる間、私たちは新しく設立されたばかりのマルセイユのコミュニティを訪れることができました。なんて素晴らしい新鮮な息吹でしょう！わたしたちはマルセイユとラルシュ・グルノーブルから暫定見習い会員申請書を、ラルシュ・ブレストから永久正式会員申請書を受け取りました。フランス国内にたくさんの新しいラルシュが生まれています！これらの申請書類は承認を受けるために国際理事会へ提出されます。

このミーティングで経験した問題解決や智恵の力は、私たちが前に進む勇気を与えてくれます。ジョリボワの信頼は正しかった。

Nominations 候補者

Regional Coordinators: Robert Morisson, Vice-Coordinator for the Region of Quebec, Canada

リジョンコーディネータ: ロバート・モリソン、副リジョンコーディネータ、ケベック、カナダ

Community Board Presidents: Mykhaylo Salo, L'Arche Kovchek, Ukraine

コミュニティボード プレジデント: Mykhaylo Salo、ラルシュ・Kovchek、ウクライナ

Community leaders: H el ene Anctil, L'Arche l'Etoile, Canada

コミュニティリーダー: エレン・アネクティル、ラルシュ・レトワール、カナダ

Ildiko Draskoczy, Barka, Hungary (バルカ、ハンガリー)

Jennifer McCauley, L'Arche Sudbury, Canada

ジェニファー・マコーリー、ラルシュ・サドバリー、カナダ

Other: Philippe Gosselin, Board President of the 'Association des Arches du Qu ebec', Canada

その他: フィリップ・ゴスリン、ラルシュ・ケベック理事会代表、カナダ

The International Experience in Australia

オーストラリアでの国際交流体験記

Eileen Glass, L'Arche Australia

アイリーン・グラス、ラルシュ・オーストラリア

シドニーの近く Mulgoa に着くと、放牧場のカンガルーやダイニングルームの外の木にいる虹色インコ(rainbow lorikeets)を見ては歓声が上がりました。カナダ、ドイツ、スイス、アイルランド、イギリス、フランス、そしてバングラデシュのコミュニティからの参加者は、最初の1週間をオーストラリアで過ごし、この国の自然環境や歴史、南太平洋の世界観、そしてもちろんラルシュ・オーストラリアについて学びました。参加者がお互いの話に耳を傾けたり、私たちのコミュニティについての話をしたり、祈りの様々な形を見たりしました。

次の4週間はオーストラリアのコミュニティで過ごし、そこで参加者はフォーメーションセッション(formation session)を行ったり自分たちのコミュニティの紹介をしたり、ローカルコミュニティで生活を共にしたり、ハンディを持つ人々のための

様々なプログラムを訪問したりしました。この交流は大変喜

ばれました。なぜなら、その他のコミュニティの長期メンバーたちがラルシュ・オーストラリアを訪れることはほとんどないからです。



その後 Mulgoa に戻って1週間を過ごし、これまでの体験をふり返りました。文化の多様性の中で生きていくことについての意見交換や、知的ハンディを持つ人に対する人々の態度の変化や反応のしかたの傾向についてのプレゼンテーションなどを行いました。

それから私たちはラルシュ・オーストラリアの30人の仲間たちと一緒にウルル(Uluru: 広大な平原の真ん中にそびえ立つ巨大な赤い砂岩の一枚岩)への聖地巡礼に行きました。砂漠に

花が咲き乱れ、アリススプリングスを流れるトッド川(Todd River in Alice Springs)を見てどれだけ驚いたことでしょう! 最初の晩に夕陽を見ていたら、ウルルの上に虹がかかっていたとても嬉しかったです! 1週間を共に過ごしたローカルコミュニティの仲間たちが家に帰って行った後、経験豊富な参加者たちはアリススプリングスで1週間のリトリートを行いました。毎日どこかの自然環境が社会環境の中に身を置くために出かけ、その場所は **Word of the day** (訳注: ←意味を調べましたが分かりませんでした。ラルシュの用語でしょうか、その日の占いのようなもの?) に関係するところでした。晴れた日の夜は星空の下で眠る人も何人かいました。

Mulgoa での最後の1週間は私たちに、人生の経験の大切さを実感し、自分たちのコミュニティへ持ち帰りたい学びを確認する時間を与えてくれました。3人の参加者の言葉をご紹介します。

「疲れきって、しばらく休む。自分と向き合い、自分自身のために時間を取り、内なるものとふれあい、私たちの内と外にあるものすべての神聖なものともう一度つながる。。。そして感謝を捧げる。」

「この体験は私の心を感謝の気持ちでいっぱいにしてくれました。どうやって生きていくかについて多くの学びがありました。」

「この国際交流体験はまるで、パンと水だけの食事から一気に5皿のコース料理になったような気がします。信じられないほど豊かな経験でした。変身してしまうかも。」



Commitment & Belonging

Tobias Gerken, Chair of the Steering Committee
トビアス・ゲーケン、運営委員会会長

皆様へ

多くのコミュニティがプロセスの第2ステージを終え、私たちは reflecting groups やコミュニティプロセス、そして個々のコンサルティングから送られるレポートに感謝しています。あなたのコミュニティが9月末までに第2ステージを終えていなくても、今後のステージでのレポートやアイデア(reflections)をぜひ送ってください。2011年1月10日までに届いたレポートはすべて受け入れます。今のところ70件のレポートが世界各地から送られてきておりますので、引き続き、仕事内容や所属先での問題点や課題に関する報告をお待ちしています。

また、country と international に関わらず、コミュニティの元のアシスタントや元仲間たちとの個々のコンサルティングを行う機会があればぜひ生かしてください。それぞれの貢献がプラスになると私たちは信じています。もしまだコンサルティングを持つ機会がなく助けが必要でしたら、あなたのリジョンコーディネーターまたは運営委員会のメンバーにご連絡ください。

まもなく、The Countries のコミュニティからのレポートの取りまとめが始まります。それぞれの country から挙げられた commitment and belongings に関する重要テーマをまとめ

るために、リジョンまたはナショナルレベルでのミーティングが持たれます。このミーティングの開催時期は11月から12月の間で、オーストリアのチロルで1月中旬に開催される運営委員会の前になります。そこで、第2ステージのすべてのレポートを取りまとめ、第3ステージの準備をします。運営委員会は International Reflecting Group によってサポートされます。

今後の計画のためにも、第3ステージのタイムフレームの設定はできるだけ早く行います。おそらく第2ステージと似たような時期、2011年3月から9月までになる可能性が高いです。

このプロセスに参加してくださってありがとうございます。個人的なお話や問題点、今後の課題などをシェアして下さることに感謝しています。あなたがたのご協力が、今後それらによりよく対応していくための手助けになります。

新しいコミュニティが設立されています

Membership Committee はエクサンプロバンスでのミーティングにて、ラルシュ・ブレスト(永久正式会員: permanent)、ラルシュ・マルセイユ(暫定見習い会員: probationary)、ラルシュ・グルノーブル(暫定見習い会員: probationary)から提出された会員資格申請書類の適合性について調査しました。

各申請書は委員(Committee)の好意的な意見を得て、IMC メンバーに報告されました。これらの申請書はエディンバラで12月上旬に開催されるミーティングで承認を受けるために国際理事会(International Board)に提出されます。

注意: このニュースレターは次号から「International Newsletter」という名前になります。理由は、私たちの新しいイントラネット(組織内ネットワーク: 近日中に稼働開始予定)が「International Meeting Ground」の名前を引き継ぐからです。この新しいイントラネットが入るため、今後ニュースレターは年4回発行します。引き続き、あなたからの記事や企画をお待ちしています! これはあなたたちのニュースレターです。世界中のラルシュの仲間たちは、あなたがたのコミュニティや国についての最新情報を読んで勇気づけられます。Meeting Ground へのご意見、ご要望、ご寄稿は communication@larche.org.までお送りください。

ラルシュファミリーデイ:なぜ、いつ、どのように。。。

マリア・ガーヴェイ、コミュニティリーダー、ラルシュ・ベルファスト、アイルランド

まだラルシュにファミリーデイがなかったころを考えると変な気がします。でも、ヘブライ語聖書には「天が下のよろずの業には時あり(There is a time for everything under heaven)」と書かれています。ファミリーデイのその「時」とは1993年 Cap Rouge でした。ラルシュにファミリーデイが必要だと提案したマリアが、その時感じたインスピレーションについて話します。

数年前ケベックで開催された総会での私たちの懸案は Global South and West 地域のコミュニティの持続性確保についてでした。資源が乏しいこと(scarce resources)が特に心配でした。



私は、ハイチから来たエブリン・ヴェルディエ(Evelyne Verdier)が言った言葉に心を動かされました。彼女の仲間たちの窮状に絶望のどん底に立たされた彼女はステージ上でこう言いました。「私たちは、神が人々を苦しめたいわけではないことを知っています。それが唯一の希望です。」その瞬間、私は自分がエブリンの姉妹であることを感じ、私たちに共通するヒューマニティ(人間性)への責任感に心を打たれました。その晩、エブリンが言った希望の力についての会話がテーブルからテーブルへと広がって行ったのです。

次の日の朝、私たちは参加者みんなに声をかけ、1年のうちの1日を決めて、その日は祈りの中で、話の中で、または寛容さの中で、お互いのことを思いやる日にしませんか、と誘いました ----- 私たちがお互いに結ばれていることをお祝いする日、そして世界に広がるラルシュファミリーのなかで最も貧しく、最も弱い人たちのニーズに応えるために行動を起こす日となるように。

私たちは「弱い人間たちの世界的なつながり (World Wide Fellowship of Fragile Humanity)」の一員であることを忘れないでいることを約束しました。家族。。。それはあらゆる面で大切なもの、そして私たちの世界を変えるもの。

L'Arche Family Day 2010

Asha Niketan Nandi Bazar
ラルシュファミリーデイ 2010

みなさんこんにちは。
私たちは10月2日(土)にラルシュファミリーデイを祝いました。毎年お祝いをします。今年は特別なお祈りの時間を、ヨガラヤム(Yogalayam)という祈りの部屋(prayer hall)で午前10時から設定しました。

両親や友達、理事会のメンバーを招待し、コミュニティリーダーがお祈りの前にみなさんにラルシュファミリーデイとラルシュの始まりについて話しました。そして、私たちのナショナルコーディネーターである P. K Kunhikanaran と Kanaka がろうそくに火をともし、ラルシュの現状について話しました。私たちはいくつかのグループに分かれてコミュニティと国々のために祈りました。お祈りしてから、1人ずつペッパーキャンドル(pepper candle)を床に置きました。お祈りが終わるとカルチャープログラムが始まりました。Prasannan が祈りを唱え、チェアマンの N. P Prabhakaran がガンジーとジャン・ヴァニ



エのつながりについて話しました。ガンジーの誕生日とラルシュファミリーデイが同じ日だったのです。最後に、みんなで昼食を取るためクラフトセンター（Craft centre）に行きました。とても楽しく素敵な朝のひとつでした。

The Zimbabwe Chicken Project

Ulrike Durrbeck, national Board President L'Arche Germany

ジンバブエ チキン プロジェクト

Ulrike Durrbeck, ナショナルボードプレジデント、ラルシュ・ドイツ

ジンバブエのラルシュコミュニティは今現在、畑で採れた野菜と sadza(つぶしたとうもろこしの粉)で自給自足の生活をしています。たまに、苦しい財政をやりくりしてスーパーマーケットでお肉を少し買えますが、それでも仲間たちの口に入るのは小さじ1杯に満たないくらいです。

こんな状態ですから、メスのにわとりは非常に貴重です。ひなは30~40セント(US)で買え、成長すると6ドルで売れます。コミュニティが自分たちでにわとりを育てたら、食事内容は改善されるし、貴重な収入源にもなります。



幸い、ラルシュの所有地は2軒とも広いので、にわとり小屋を建てるのに十分な面積があります。エサはとうもろこし製粉機から出る廃物と(この機械の購入もチキンプロジェクトの一環です)、これから植える予定の農業用森林樹の葉でまかなわれる予定です。

鶏舎の建設計画はすでに順調に進行しています。建物にはにわとりを泥棒やねずみ、蛇から守れる設備にする必要があります。そのため、囲いの中はコンクリート敷きにして、その上におがくず(アグロフォレストセンターから無料でもらえる)を敷き詰めるのです。このおがくずは使用後に畑の肥料にします。建築材料はアスベストを使った材料を避け、波状の板や屋根瓦などの代替物質

を使用するよう注意します(残念なことに、ジンバブエではアスベストの危険性がまだ広く知られていないため、建築業界ではよく使われています)。

現在、フィンランドの慈善援助組織から融資を受けられるかどうか照会中です。ハンディを持つ人たちはプロジェクトそのものが始動してから仕事に携わって行くのはもちろんですが、プロジェクト開始の一番初めの段階から計画を立てることや準備、建設作業と一緒に関わっていることが必要です。同時に、ドイツ・ジンバブエワークキャンプアソシエーション(German-Zimbabwe Workcamp Association)も重要なパートナーとして、効率よくおがくずや飼料を運搬したり、若いボランティアを派遣したりします。

Haiti and Hope

Evelyne Bzin-Vender, Board President, L'Arche Haiti (interviewed by Jonathan Boulet-Groulx:

ハイチと希望

Evelyne Bzin-Vender, 理事代表、ラルシュ・ハイチ(聞き手: Jonathan Boulet-Groulx)

地震発生後10カ月が経っても、ハイチは混乱し、先が見えない状態です。ハイチの人々はまだ再建計画も経済援助の確約も目にしていません。インフラ整備も整わず、お粗末なシェルター、キャンプは人口過密状態、ポルトープランスではコレラ感染が広がっており、解決策を見つけるのは非常に難しいです。

その一方でラルシュ・ハイチでは、予定より遅れましたが仮の建物がほぼ完成しています。幸い、私たちの支援者グループが最初から動員されたので、この場を借りて皆さんに感謝申し上げます。



実際、建設中の仮設シェルターは対台風・耐震デザインになっており、半永久的な住居になる予定です。しかし、今のところコミュニティメンバーはまだテントで生活しています。暴風雨やサイクロン、大雨の脅威は引き続きあります。時には雨が大量の泥とともにテントに流れ込みますが、すぐに希望を持ち直し、それが人々を強くしてくれます。

仲間たちはまだラルシュ・カルフルで生活しています。何人かが去りました。この8カ月で3人が亡くなり、3人が生まれ、結婚式が2組ありました。これらの人々に住居を提供する準備は整っていませんでしたが、連帯感は示せました。

EU(欧州連合)は引き続きラルシュ・ハイチにとって不可欠なパートナーで、私たちの2つのコミュニティの学校を拡大する資金援助をしてくれます。

この新しいエネルギーをどうやって維持できるでしょうか。私たちのメンバーすべてを勇気づける仕事は今、はじまりました。ラルシュ・ハイチの今後についてのミーティングは、イザベル・ロバート(Isabelle Robert、L'Arche International's representative for Haiti)とコミュニティメンバーを迎えて11月初旬に始まります。

状況に進展があれば随時お知らせします。コレラに感染しないよう衛生面に非常に気を使っています。私たちを皆さんのお心に留め、お祈りしてくださいますようお願いいたします。



L'Arche is his home

Gottfried Lamprecht, Community Leader in L'Arche Tyrol, Austria

ラルシュは彼の家

ゴトフライド・ランプレヒト、コミュニティリーダー、ラルシュ・チロル、オーストリア



過去18年間 ーつまりラルシュ・チロルの設立以来ー、ランバート(Lambert Kleissl)は Gries am Brennerにある私たちのコミュニティハウスで生活しています。今年2月26日、私たちはランバートの70歳の誕生日を一緒に祝いました。ラルシュ・チロルの今のメンバーたちや元アシスタント、村の友人たちがたくさん参加して盛大なお祝いになりました。なんと Gries から吹奏楽団が来て、ランバートのために演奏してくれました。彼は心から感動して自分で指揮棒をふり、目には喜びの涙があふれていました。以前、ランバートがまだ歩けたころ(彼はいま車いすを使っています)、地元の農場へ行き、干し草を集めたり薪を割ったりするのが楽しみでした。そしてこれらの作業をする時と同じくらい楽しそうに、農夫たちとビールを飲んでいました。彼が話す言葉は少しだけど、人々と温かく接しています。ラルシュと村の人たち

が仲良くやっているのは、ランバートが人々とつながることを楽しみ、だれとでも友達になれる人柄によるところが大きいのです。最近の彼の楽しみは、ハウスの前に座ってそこを通り過ぎる車に元気よく手をふることです。その代わり、機嫌が悪い時はこぶしを振り上げます！通りすがりの人々が優しい言葉をかけると、その人たちとのおしゃべりを乐しみます。

ランバートの誕生日の2、3日後、私は彼のベッドルームを訪れました。そこにたくさんの美しいバースデーカードが飾られているのを見て、私は心を打たれました。ランバートにはたくさんの友達がいることがわかりました。ラルシュ

を通じて、彼は家族と自分の家を見つけたのです。彼は村では有名人で大切にされているし、彼自身も村人たちの役に立っているのです。

Outreach initiatives from L'Arche in France

Celine Roche, Communications L'Arche in France

ラルシュ・フランスから奉仕活動イニシアチブについて

セリーヌ・ロシェ、コミュニケーション ラルシュ・フランス

今日、ラルシュがあるところはどこでも、コミュニティは地元社会に対する使命を持っています。それは正義・公正に関するものですが、基本的には私たちが一人一人のため、特に社会の隅に追いやられている人々のために、この社会をもっとフレンドリーで心地よい場所にするのです。でも、どうやって会話を始めたらよいのでしょうか？ どうしたら私たちのメッセージを届けられるでしょうか？ 影響を与えるにはどうしたらよい？ その質問に答える4つの方法について、ラルシュ・フランスがお話します。

「Let's be different (レッツ・ビー・ディファレント: 人と違うものになりましょう)」これは7月にパリ郊外で開催され、若者600人が参加した5日間のフェスティバルの名前です。テーマは「思い切って個性的に！」。この大会を成功させたキープポイントは、参加者の組み合わせでした。ハンディを持つ人と持たない人の、二人一組。すでに知り合いだったペアは何組かいましたが、全員がお互いを知っているわけではありませんでした。

プログラムにはアートワークショップ、スポーツイベント、reflection groups (考えるグループ?)、祈りの時間、分かち合い、徹夜祭、夜会など、たくさんのアクティビティがありました。参加者は常に二人一組で行動したので、イベントの前はお互いを知らなくても、最後には確実に知り合いになっていました！



このイベントの根底には真摯な目的がありました:それは、一人ひとりの違いを祝福し、弱さを受け入れ、私たちを変えるような信頼関係を築くことです。

その上、このフェスティバルはその他の組織とラルシュがパートナーシップを築く良い機会になりました。:ジャン・バニエは2つの慈善団体のそれぞれの設立者2人と、環境維持開発の専門家である経済学者1人とともに壇上に上がりました。さらに、このイベント全体が Bertrand Figarol 氏のリーダーシップのもと、信仰と光(Faith and Light)と OCH(ハンディを持つ

人々のためのキリスト教組織)、そして A Bras Ouverts(Open Arms)という3つの団体の共催でした。このイベントのもようは www.letsbedifferent.com でご覧いただけます。

次に、「the volunteers in L'Arche – an experience for life (ラルシュのボランティア – 命の体験)」という映画について。コミュニティはフォワイエに通い、そこで生活する人々で成り立っています(フランスでは彼らをボランティアと呼びます)。フランスでは、新しい人々にラルシュへ来てもらうことを奨励するリソースを作ろうというアイデアがあります。そして、そのための一番良い方法は、ボランティアたちが自分の体験を直接語ることです！

映画製作者だった Anne Chabert d'Hieres さんと Nicolas Favreau さんは、彼らの作品の中でボランティアグループにインタビューし、ラルシュに入った理由や日常生活、そしてこの経験によって何を得たか、自分の中の何が目覚めたか、などについて取材しました。ボランティアたちは、ハウスでハンディを持つ人々と共に過ごした特別な時間について語りました。Celine と共にいた Aurore は新しい世界をつくり直し、Maelle の仲間の Swantje は、シンプルなことの中に喜びを再発見すること、例えば太陽の光を浴びて輝くネックレスに反射するたくさんの光の美しさに感動することについて話しました。

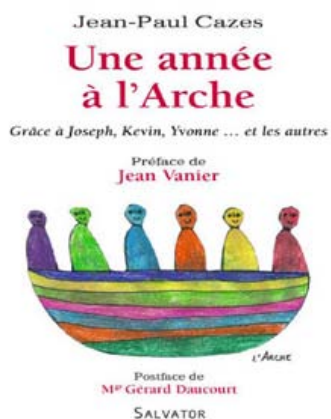
また、ボランティア第一日目に何を感じたか、そして、ハンディを持つ人々との豊かな人間関係についても話してくれました。すべての経験は彼らに、聴くこと、一瞬一瞬を生きること、そして同時に自分のことを探って見つめることの大切さを教えてくれました。

ラルシュ・フランスはこの12分のフィルムを、ネットやボランティア派遣組織を通じて一般公開する予定です。詳細は

http://www.arche-france.org/arche_volontaire--volontaire

をご覧ください。

最後に、新刊を2冊ご紹介します。1冊目は Jean-Paul Cazes 神父がラルシュ・La Rebelleir で過ごした1年の体験談で、「愛は名医」だということに気付いたお話です。2冊目はラルシュ・ディジョンの発行で、想像力に富んだ募金活動です！10ユーロで美しい挿絵と面白い物語を楽しめるだけでなく、ラルシュ・ディジョン設立20周年記念のために計画しているローマ巡礼の旅の実現にあなたが協力して下さることになるのです！



翻訳: HARUMI KENJO